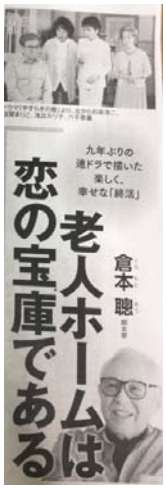
やすらぎの郷



標題は平日昼に放映している連続ドラマ。録画して見ているが、なかなか面白い。『文藝春秋』5 月号「老人ホームは恋の宝庫である」からドラマを紹介しよう。

4 月 3 日スタートのドラマ『やすらぎの郷』(テレビ朝日系)。毎週月曜日〜金曜日、午後 12 時 30 分〜12 時 50 分という時間帯で放映中だ。倉本聰氏(82)にとっては 9 年ぶりの連続ドラマとなる。物語の舞台は老人ホーム「やすらぎの郷 La Strada」。映画・テレビ業界を支えた俳優・脚本家・音楽家などの〝業界人〟しか入居出来ない施設である。厳正な入居資格を満たした老人たちがここに集い、穏やかな人生の終末期を過ごしている。入居者を演じるのは往年の名優たち。主人公の脚本家・菊村栄を演じる石坂浩二(75)と、大女優・白川冴子に扮する浅丘ルリ子(76)は、2000 年の離婚後初共演。脇を固めるのもスターばかりだ。有馬稲子(85)、加賀まりこ(73)、五月みどり(77)、野際陽子(81)、藤竜也(75)、ミッキー・カーチス(78)、八千草薫(86)、山本圭(76)‥‥。ドラマのテーマは「高齢化社会」、そして「生と死」。倉本氏が作品を通して伝えたいこととは―。

書こうと思ったキッカケは、僕の同年輩の友人たちが漏らした「見るテレビ番組がない」という言葉でした。今のテレビの最大の問題は、お客さん=視聴者の創造性(クリエイティビティ)を引き下げてしまったことでしょう。視聴者は僕たちが考えている以上に創造力が豊かです。彼らは自ら想像し、創造したがっている。テレビディレクターなんかよりも遥かに頭が良いのです。

ところが、テレビ局は「分かりやすく! もっと分かりやすく」をモットーに、視聴者を馬鹿にし、舐めた姿勢で番組を作っている。誰にでも分かるように、一番低い水準に合わせたコンテンツ作りをしているから、テレビはつまらなくなってしまったのです。これはテレビに限った話ではありません。今ある全てのメディアに共通することでしょう。様々な技術革新があり、テクニカルな「面白さ」や「派手さ」は昔に比べて格段と進歩しました。ハリウッド映画を見ていてもその点には毎度感心します。しかし僕は、昔の映画やドラマにあったはずの「しんみりとした感動」や「心を打つストーリー」という、映画やドラマ作りの根源が忘れられつつある気がしてなりません。

そんな想いもあり、僕は死ぬまでにキチンとしたドラマを残したいと考えていた。だから、本作を書くことにしたのです。

(2017 年 9 月 4 日)